

時の動き

ロシア軍のウクライナ侵攻は許せない

社会主義協会

津野 公男

まずロシア軍の撤退を

ロシア軍の侵攻開始から約1カ月を越える。

ウクライナでは、連日の攻撃を受け多くの民間人の犠牲者が出ている。マスコミ報道などでも周知のように、600万人を超える多くの避難民が国境を接する諸国に溢れ、またウクライナにとどまり、家族と分かれ、最後まで祖国を守るために侵略者と闘う決意を自発的に固めている多数の男女がいる。侵攻当初は、短期間にウクライナを降伏させ、ロシアの希望するような要求を押し付けることになるとみられていた。しかし、プーチンの目論見とは

異なり、ウクライナ軍の士気は高く、国民の結末も予想を超えるものであった。

ロシア軍については、本当に訓練だと思っていた兵士が多かったとか、あらたに徴兵された訓練度合いの低い若い兵士が多く、戦意も低かったとかいわれている。なかば騙されて戦場につれてこられたのである。当然多数の死者を生み出している。

これ以上の蛮行は人道に許せるものではない。これ以上の犠牲者を出さないためにはロシア軍の早期の撤退しかない。

プーチンも悪いが

アメリカも悪いか？

まず整理しなければならぬことは、「いかなる口実をもつても他国への武力侵攻は許せない」という原則である。これが当面の闘いの原則であるし、アメリカのイラク侵攻にたいしてもアフガン侵攻に対してもこの立場で闘ってきたはずである。これが当面する闘いのメインテーマである。

プーチンも悪いが、NATOの東方拡大にこそ原因がある、あるいはアメリカにこそ問題があるという意見がある。これは大事なことから整理しておきたい。



ロシアでの反戦デモで拘束される参加者

プーチンの言うように、NATOを東方に展開させないという約束があったことは事実である。ただ、慌てて付け加えておきたいことは、東方拡大の背景は、アメリカも途中から悪乗りしたといえるが、英仏独は慎重・抑制的で、積極的であったのはかつての社会主義圏にあったポーランドやハンガリー、それにバルト三国などが加盟を急

いだことが大きい。

不幸なことであるが、ロシアの力が回復して再びかつてのソ連時代の支配に戻ることにのいけば恐怖である。社会主義体制崩壊の余震が続いているともいえよう。日本のような島国にいる我々には計り知れないことであるが、幾たびも民族間の戦乱を潜り抜けてきた欧州諸国ゆえの感情であろう。ロシア侵攻を受けての、中立政策をとってきたフィンランドのNATO加盟の声の高まりや、スウェーデンのソ・フィン戦争以来の、あるいは永世中立国スイスのウクライナへの武器供与などこれまでには想像できなかったことが起こっているのもこういう背景があるからであろう。またプーチン個人に対する幻想はだれも持っていないと思うが、当初4年、2期までの大統領任期を6年に、そして最近では再選を無制限に拡大しているような指導者である。もちろん、くどいと思われるかもしれな

いがアメリカやNATOの批判は必要で、それはまず残虐な戦争行為を終了させたのちに行うべきものである。

世界で高まる反戦運動

いま世界では、ベトナム反戦闘争時に匹敵する闘いが盛り上がっている。日本でも久しぶりの大規模な、あるいはかつての「ベ平連」を思い起こされる草の根的な闘いも広がっている。

また、インタビューでの「私たちが侵略を許したと後々まで言われたくない」というロシアの若い女性には心を打たれるものがある。もし歴史が変わりはじめているとしたら、いかなる理由があつたとしても、自国の、武力をもって他国侵攻を企てる支配エリートを許さないという意識の高まりだ。ただ、あるのは国境を越えた国際連帯であるという思想である。世界の労働者は団結しなければならぬ。

(つのお きみお)